

「よくある病気」

認知症

日本は現在65歳以上の高齢者が、約20%を占める超高齢社会となっています。その中で65歳以上の在宅高齢者の100人のうち4〜6人が認知症患者さんです。現在日本全体では160万人以上の認知症の患者さんがいます。

つまり認知症はけっしてめずらしい病気ではなく、高血圧や糖尿病と同様によくある病気であると考えていただければと思います。

このことは、認知症に罹ること（か）を過剰に悩んだり隠したりせず、また認知症患者さんを社会で支えるということの基本となることです。認知症は、平成17年1月に「痴呆症」から「認知症」に名称が変更されました。このことも認知症患者さんの尊厳を保つために大きな意味がありました。

Q 健康な人の物忘れと認知症の患者さんの物忘れ

認知症の患者さんの物忘れは、「同じことを何度も尋ねる」ことでご家族から気づかれることが多く認められます。

健康な人の普通の物忘れは体験の一部分を忘れる「物忘れ」です。認知症患者さんの物忘れは、体験全体をすっかり忘れてしまうことを特徴とする「物忘れ」です。

例えば朝食を食べたことは覚えていますが誰と一緒に食べたのか、その人たちの名前を思い出せないのは健康な人の物忘れですが、朝食を食べたこと自体をすっかり忘れるのが認知症の「物忘れ」です。

例えば認知症患者さんは、「朝ごはんを食べたあな」と「朝ごはんを食べたあな」とご家族に尋ね、ご家族が「さつき食べたでしょう」と答え、認知症患者さんは「ああそうだね」と一度は納得したあとまた「朝ごはんを食べたかな」と繰り返し尋ねてくることとなります。

このように認知症は、昔のことは覚えている

のに、新しい事柄が覚えていられない。今日の日付や今どこにいるのかわからない。道具がうまく使えない。物の名前がでてこない。物がなにかわからない。段取りが立てられないなど脳が直接障害されたために生じる中心的な症状「中枢症状」と幻覚、妄想、うつ、徘徊、焦燥、攻撃性といった精神や行動の異常である「周辺症状」とに分けられます。そしてこの「周辺症状」は患者さんの個別的な要因、例えば病前の性格、現在の環境的な要因、患者さんを取り巻く心理的状况などが複合された結果が生じると考えられています。し、周囲の対応が不適切なために

生じる症状ともいえます。認知症の患者さんとのかわり方介護では、なぜこれらの周辺症状問題行動が出現するのか考えることが必要です。問題行動は、認知症患者さんが脳の障害によって目的にかなった行動がとれないための「失敗行動」だととらえれば、どうすれば失敗せずに済むだろうと、患者さんの立場での介護を考えることができます。

認知症になっても「心」は生きています。認知症の人の「その人らしさ」を大切にすることがわり方を目指しましょう。（医師会）